

2017年10月29日 主日礼拝メッセージ

聖書：エペソ人への手紙5章21～33節

説教：妻たちよ、夫たちよ

はじめに

私は、いまから32年前ですが、うまくやっ
ていけるだろうという根拠のない自信だけ
で妻と結婚しました。結婚とはなにか、だれ
からも教えられませんでした。ところがいろ
いろな問題にぶつかるたびに夫婦げんかを
繰り返すようになります。お恥ずかしい話で
すが、一ヶ月間妻と口をきかないということ
もありました。とうとう結婚8年目に妻から
離婚話を切り出され、絶望してしまいました。
それでもなんとか助けてもらいたいという
一心だったので、何を思ったのか自分
でも分からないのですが、次の日曜日に妻が
通っていた教会に行き、牧師室に駆け込んで
「クリスチャンにしてください」と叫んでお
りました。牧師は、「それでは聖書の学びを
しましょう」と言ひまして学びが始まりまし
た。そこで初めてわかったのです。聖書の話を
結婚する前に聞いておくべきだった。今こ
のようにして妻と別れることなく、結婚生活
が続けられています。なぜできたか。理由は
ひとつしかない。聖書が語る神に出会ったか
らなのです。

今日はご一緒に、夫婦についてもう一度聖
書から教えられていきたいと願います。

1 時代遅れなのか？

その聖書に何と書いてあるか。皆さんは
22節のみことばを読んで大いに疑問に思う
はずです。「妻たちよ。主に従うように、自
分の夫に従いなさい。」

昭和の昔ならばいざ知らず、今の時代、妻

に対して夫に従いなさいと教えるなんて聖
書は時代錯誤も甚だしい。こんな聖書からな
にかを学ぶことができるのか。そんな疑問で
す。

いっぽう、聖書を神のことばと信じる方に
とっても戸惑いがあります。「従いなさい」
と命令されたから、「はい、そうですか」と
言って従えるものではない。どうしたら
いいのか。そんな疑問が渦巻いているはずで
す。

2 キリストと教会

1) キリストを恐れる、敬う

そこでまず21節に注目します。「キリスト
を恐れ、互いに従い合いなさい。」22節以降
で「妻たちよ」、「夫たちよ」と語っていく前
提がこれです。これを抜きにしては、後のこ
とを正しく理解できません。

ここに「キリストを恐れ」とあります。恐
れる、と聞くと、神が恐ろしい方なのでぶ
ると震える、そんなことを思い起こすかも
知れませんがそうではない。この「恐れる」
ということばは23節で「尊敬する」と訳さ
れていることばとまったく同じことばが使
われています。

例えばこういうことになるでしょう。とて
も尊敬できる先生がいたとします。普通どう
しますか。先生を尊敬するけれど、教えても
らったことには従わない、ということはない。
尊敬できる先生なので、教えてくださいること
には一生懸命従いたい。そう思うはずです。

キリストと教会の関係はこれと同じです。

教会はキリストを尊敬します。キリストが教えてくださることならばそれに従いたいと願う。それが教会に集う人たちの共通した思いです。

2) キリストはからだの救い主

では、教会はどうしてキリストを尊敬するのでしょう。「イエス・キリストは神なので、もうとにかく理由など関係ない。神だから尊敬する」、ということでしょうか？でも、もしそうならば、ほかにもたくさん神がいます。神社の神でも、八百万の神でも尊敬すればよいでしょう。昔、ミッキーマウスを神としている人たちがいたと聞いたことがあります。自分が、これは神だと思ったらそれを拝めばよい。そういう考え方もあります。しかし、私たちはイエス・キリストと呼ばれる方だけを尊敬します。理由は一つしかありません。25節です。「キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられた。」

この方は、私たちの罪の身代わりとなって十字架で死んでくださった。だから私たちは尊敬する。世の中に数え切れないほどの『神』と呼ばれる存在はあるでしょう。でも人間の罪のために命をささげた神はいるのか。少なくとも、ミッキーマウスは人間のために命を捨てません。仮に、人間のためにいのちを捨てる神がいたとしても、死からよみがえられた神はおられるのか。私たちを死から救い、永遠のいのちを与えてくださる神はおられるのか。ほかにはない。教会に集う私たちはそのように信じて、イエス・キリストを尊敬し、従いたいと願います。

3 妻と夫

1) 妻たちよ。夫を敬いなさい

このことを前提として次に、夫婦のことを考えていきます。22節。「妻たちよ。主に従うように、自分の夫に従いなさい。」

世の夫たちはここを読んで、大喜びするかもしれません。でも、勘違いしてはいけません。「主に従うように、自分の夫に従う」とあります。ただ「従え」でははい。夫と妻の関係は、キリストと教会の関係とよく似ている。教会がキリストを尊敬し、従うように、それと同じように、妻は夫を尊敬し、従いなさい。そう言っています。

そうしますと、妻である方はご主人に向かつてなんと言いたいのですか。「従えという前に、尊敬できる夫になりなさい。尊敬できる夫ならば、喜んで従います。」そう言いたいですよ。そのとおりです。聖書では、妻のことが先に出て来ているので、どんな夫であろうとも無条件で妻は夫に従わなければならないかのように見えたのですが、実はそうではない。夫が偉いから妻の「かしら」だと言っているのではない。責任が重いから「かしら」と言われる。よく読むと夫の側の責任が非常に重い。

2) 夫たちよ。妻を愛しなさい

では夫は妻をどう愛していくのか。

もう一度前提に戻って確認します。25節に「キリストが教会を愛し」とあります。なぜ愛するのでしょう。教会がキリストに従うかどうか、それを見てから愛するかどうかを決めたのか。そうではない。相手がどうするとかいっさい条件はつけないで、一方的に愛してくださる。これがキリストと教会の関係です。この関係を夫と妻の関係に当てはめるとどうなるか。「妻が夫に従うかどうかを見てから愛するかどうか決める」、のではない。

もしそう思っている夫がいたら、即刻考えを改めてください。妻がどうであれ、夫は無条件で妻を愛する。これが夫婦の原則だと聖書が教えます。夫である方には誠に申し訳ないのですが、聖書が言っている事ですから、曲げることはできません。

では、妻を愛するとはどのようなことか。「愛しているよ」とことばで語ることか。もちろんそういうこともときには大事かもしれない。でも、聖書はもっと厳しいことを要求します。これもキリストと教会の関係と同じです。もう一度25節を読みます。「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。」

キリストが教会を愛すると言うとき、どのように愛されたか。いのちを献げてくださいました。私たちがすばらしいことをしたから、いのちを献げたのではない。私たちが神に対してひどい罪を繰り返しているときに、神の方から進んでいのちを献げてくださいました。それが神の愛し方です。それと同じように夫は、どのような妻であっても無条件で愛さなければならない。夫たる者は、妻のために喜んでいのちを捨てなければならない。みなさん覚悟はできているでしょうか。

最初、「妻たちよ。夫に従いなさい」というのを読んで夫である方は喜び、妻である方は大いに不満に思ったかもしれない。でも、妻である方は喜んでください。夫は妻のために死んでくれますから。夫である方は覚悟を決めてください。どんな妻であろうとも、自分の妻のためにいざとなったらいのちを捨てなさい。これが聖書の命令です。

3) 妻のためにいのちをささげられる幸い

夫である方はがっかりしましたか。しかし、もう一度考えてください。私たちが神に対して罪を犯していたとき、キリストは私たちのためにいのちをお捨てになりました。しぶしぶ、文句を言いながらいのちを捨てたのか。あるいは、「おまえのためにいのちを捨ててやるのだから、感謝しなさい」と恩を押し売りするようなことをして死なれたのか。

聖書の中に福音書というところがあって、そこにはイエスが何をされたのか、どのようなことを語ってくださったか、すべて事細かに書かれています。そこを読むと分かる。この方は、ご自分の身分を隠していきます。本当は神の子と呼ばれる方であるのに、ご自分のことを人の子と呼びます。病をいやし、悪霊を追い出し、数々の奇蹟を行うと同時に人の罪を赦していきます。人の罪を引き受けてご自分の背中に背負って行かれます。きよい方が罪を背負われ、十字架で死の苦しみを味わいます。この方には罪がありませんでしたから、普通ならば叫ぶはずではないですか。

「私は無罪だ。十字架から降ろしてくれ。」ところがこの方は、自分を十字架につけ、殺そうとする者に恨み言を言うのではなく、かえってこう祈りました。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているかが分かっていないのです。」自分を殺す者のために祈れるでしょうか。しかし救い主であるイエス・キリストは祈ってくださいました。これを見ても分かるように、キリストが私たちのためにいのちを捨てる時、決して恩を売るようなことはしなかった。むしろ私たちを救うために喜んで命をささげて、愛を現してくださいました。

キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、それと同じように夫

は妻を愛さなければならない。これが夫婦の土台です。できるでしょうか。いま私は皆さんの前でえらそうに語っていますが、私だつて非常に難しい。でも、目指す所はわかります。失敗するたびに、叱られながら、一生かけて学んでいくしかないと思っています。

これからお二人は様々な試練に出会っていくでしょう。どうしたらよいか和解できずに途方に暮れることもあるかも知れない。そうであっても、もし根底に夫は妻のためにいのちを捨てる覚悟があるとわかっているなら、二人は必ず立ち直れる。これが聖書の約束です。

夫である方は「大変だ」と思ったでしょう。最後に言います。見方を変えたらどうでしょうか。夫たちは、外で働いていろいろな業績を挙げるかも知れない。しかしそれはいつか消えていくむなしいものに過ぎない。でも、もし本当に妻を愛することができたならどうか。キリストが私たちに示してくださった愛は、絶対に消えることがない。神の愛は、人を喜びに導く愛です。それと同じことは夫にも言える。妻の喜びは夫の喜びとなります。

お二人の上に、そして世の全ての夫たち、妻たちの上に祝福がありますように。